

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（ 医学 ）	氏名	津久江亮太郎
学位授与の条件	学位規則第4条第1・②項該当		
<p>論文題目 Do Individuals with Alcohol Dependence Show Higher Unfairness Sensitivity? The relationship between impulsivity and unfairness sensitivity in alcohol-dependent adults (アルコール依存症患者は不公平感を感じやすいか？衝動性の関連からの考察)</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主査 教授 丸山 博文 印</p> <p>審査委員 教授 田中 純子</p> <p>審査委員 教授 長尾 正崇</p>			
<p>[論文審査の結果の要旨]</p> <p>アルコール依存症は飲酒コントロールの喪失が臨床症状の中核をなす精神疾患であり，発症後は再発を繰り返しながら慢性進行性に経過し，精神と身体に大きな障害をもたらす。これらの障害は，個人的な問題にとどまらず，様々な対人関係上の問題を引き起こし，孤立，家庭崩壊，失業につながることも少なくない。これまでの研究から，アルコール依存症では対人関係において不公平感を感じやすいことが最後通牒ゲーム Ultimatum game (UG) と呼ばれる行動実験によって明らかにされている。その一方で，アルコール依存症では衝動性の高さも指摘され，不公平感の感じやすさとの関連も推測されている。しかしながら，アルコール依存症における対人関係上の問題を生じるこれらの要因の関連や病態メカニズムは明らかにされていない。そこでわれわれはアルコール依存症患者および健常者に対してUGと衝動性の行動実験として遅延価値割引課題 Delay discounting task (DDT)を行い，アルコール依存症の不公平感の感受性と衝動性との関連について検討することとした。</p> <p>米国精神医学会の診断基準（DSM-IV-TR）を満たすアルコール依存症患者32名および健常者36名に対して，UGとDDTの二種類の行動実験を行い，不公平感の感じやすさと衝動性を評価した。UGは，ある一定金額を提案者（コンピューター）と応答者（被験者本人）の二者間で分配する課題で，分配額は提案者が決定し，応答者がその提案の受け入れ，もしくは拒否を選択する。提案を受け入れる場合，両者に提案額が配分され，拒否する場合，両者とも配分なしになる。分配比率の多寡により公平性を変化させ「公平」，「やや不公平」，「不公平」の三条件を設定した。「不公平」条件での受け入れ率を算出し，不公平感の感受性の指標とした。DDTは，「今日もらえる小さな報酬：即時報酬」と「後でもらえる大きな報酬：遅延報酬」を対提示し，どちらか一方を選択する課題である。具体的には，三段階の金額設定（低金額1,000円，中金額10,000円，高金額100,000円）において，遅延期間（7種類；1日後，1週間後，1カ月後，6カ月後，1年後，5年</p>			

後、25年後)による遅延報酬と即時報酬の価値が主観的に等しく感じられる主観的等価点を求めた。各遅延期間の主観的等価点を結んだ曲線を描き、その曲線下面積 area under the curve(AUC)を衝動性の指標とした。臨床指標としては、言語性知能(JART)、問題飲酒指標(AUDIT)、ファーガストローム・ニコチン依存度指数(FTND)、ベック抑うつ尺度(BDI-II)を用いた。なお、本研究は広島大学倫理審査委員会の承認したプロトコールに従って行い、全ての被験者からは文章で同意を得た。

結果は、以下のごとくまとめられる。UGに関して、アルコール依存症患者は健常者よりも不公平条件において受け入れ率が有意に低かった。DDTに関して、交互作用は認めなかったが、金額の主効果を認め、高金額条件と比較して低金額条件では有意に衝動性の高い選択を行った。UGとDDTの両行動指標の相関に関して、アルコール依存症患者においてUGの不公平条件の感受性とDDTの低金額条件での衝動性の有意な相関を認めた。健常者では両行動指標の有意な相関はなかった。また、UGの受け入れ率と臨床指標(年齢、JART、AUDIT、FTND、BDI-II)の間に有意な相関は認めなかった。

今回の検討から、アルコール依存症患者においてのみ、UGで評価した不公平感の感受性とDDTで評価した低金額条件の衝動性に関連があることが明らかになった。すなわち、アルコール依存症は、健常者とは異なり、不公平な状況において不公平感を感じ、相手の提案を拒絶する行動を選択するが、その行動選択に衝動性が関与する。先行研究によると、アルコール依存症と関連するのは、衝動性の中でも不快情動を低減させるために行動を起こす「負の切迫性」と、ある行動を起こす前にその行動による結果について十分に考えることができない「計画性のなさ」とされる。これらの研究知見を併せ考えると、アルコール依存症患者は、UGによって惹起される不公平感(不快情動)を低減するために、その後の自分の不利益を考慮できないまま衝動的な行動選択を行うものと考えられた。今回の研究で、様々な対人関係上の問題を呈するアルコール依存症において、その基盤となる対人関係上の不公平感の感じやすさを衝動性との関連から明らかにできたことは、病態解明や治療介入につながる重要な進展と考えられた。

以上、本論文はアルコール依存症に特徴的な不公平感と衝動性の関連性を明らかにしたもので、アルコール依存症の病態を理解するための重要な知見を示している。よって審査委員会委員全員は、本論文が津久江亮太郎に博士(医学)の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。